



ふうの木のある学校からⅡ

高鍋町立高鍋西小学校 学校だより 11月 文責 校長

言われてうれしい言葉

「ありがとう」「さすが!」「すごい!」・・・。

みなさんは、どんな言葉を言われるとうれしいですか?

その時の周囲の状況や、自身の体調や対人関係によって、うれしく感じる度合いも異なるかもしれません。

脳の中では、うれしさや幸せを感じる時「ドーパミン」「セロトニン」「オキシトシン」といった神経伝達物質が分泌されます。

① ドーパミン

達成感や喜びをもたらす物質。「おいしい食事」「目標達成」などの瞬間に分泌され、快感を生み出します。

② セロトニン

気分の安定に寄与し、ストレスを軽減する物質。おだやかな幸福感をもたらします。

③ オキシトシン

「愛情ホルモン」として知られ、親密な人間関係や絆を深めることで分泌され、安心感や満足感を高めます。

幸せを育むには、「感謝の気持ちをもつ」、「人とのつながりを大切にする」、「運動や瞑想(めいそう)を取り入れる」といった行動が効果的だそうです。

脳内の化学反応だけではなく、日々の小さな幸せを見つけ、感謝の心を育み、人とのつながりを大切にする事・・・。

今年もあと2か月(年度末まで5カ月)。子どもたちが、たくさん「幸せ」を感じられるような言葉かけをしていきましょう。

ハーモニー

11月11日(火)木城町と合同の音楽祭が行われ、本校は5年生が出場しました。

ステージ上での立ち居振る舞いをはじめ、合唱・合奏の細かな表現の仕方まで、吉行先生から指導していただきました。

事前の音楽室や講堂での練習発表を見ていて、大丈夫かな?と思う場面もありました。

しかし当日、本物のステージに立ち、満員の聴衆から注目されるという緊張感も手伝って、素敵な演奏をすることができました。

音楽は、演奏する側の声や音の違いや調和によって生み出されますが、それをきちんと聴く(受け止める)存在がなければ、演奏のよさや面白さは伝わっていきません。

演奏が終わり聴く側になった時の態度はどうあるべきか、成果とともに課題も見えたひと時でした。

ソーシャル・スキル

「仲のよい友達とけんかした」
「友達が、他の友達の悪口を言っているの聞いていやになった」
「回りが騒がしくて、集中できない」等々、

子どもたちは、20~30人程度の集団の中で、心地よい体験だけでなく、悩んだり意欲が低下したりする経験をすることもあります。

学力も大切ですが、仲直りの仕方、友達への助言や要求の仕方等、そういった場面で身に付けたスキルも子どもたちの「生きる力」になります。

場合によっては、大人が介入し過ぎず、じっと見守ることで、より良い方向に向かうこともあります。どこまで口をはさみ、手を差し伸べるか?この加減が非常に難しい・・・。

「目的を決められる人間」

これもある書籍(「AI時代に仕事と呼べるもの」三浦慶介著)からの引用です。

皆さんは、こういった感想を持たれるでしょうか？(以下、引用)

親というのは子供につい口を出したくなくなってしまうものです。かくいう私も小学生の子供が2人いますが、気付いたら、「先に宿題をやりなさい」「明日の準備は?」「体操服はいるの?」「早く寝なさい」と、細かいことをいちいち指示してしまうことが多くあります。

しかし、この「〇〇しなさい」という指示をすること自体、AI時代に適応する子供を育てるにはリスクがあると感じています。

AI時代とは、AIが中間プロセスをすべて代行してしまう時代です。

複雑な計算でも、法律や医学の専門的な知識でも、AIが高度な情報処理から最適解を求めてくれます。間違えることもあるとはいえ、その処理速度や知識の広さは人間では到底かなうものではなくなりました。

そんな時代に最も危険な生き方とは何か?
「指示待ち人間になる」ということです。

指示を待つということは、AIと同じタイミングでしか動き出せない人間ということ。となると、性能だけでなくコストも圧倒的に安いAIと競うことになり、勝負になりません。

これまでの時代であれば、それでも問題にならなかったことも多かったといえます。それは単純に、人間がやるべき仕事が多量にあったからです。

言われたとおりに資料を用意する、コードを書く、会議を手配する・・・などなど。

しかし、その大半はAIにとって代わられる時代になりました。

つまり、AI時代にできる仕事が非常に限られてしまうということ。です。

逆に、AI時代に価値をもって働ける人間とは何か?
(右へ続く→)

それは「目的を決められる人間」です。

主体的に動き、考え、目的を決めることができる人間は、AIを使って目標達成の最短距離を歩むことができます。

やるべきことを考えれば、すぐにAIが実現してくれるため、これまでに比べると飛躍的な仕事の生産性を実現することができます。

つまりは、目的を決められる人間こそがAIを使う側に回り、AIの恩恵を受ける人材になるということです。

自分の子供をAIに仕事を奪われる人間にはしたくない。そう思うのは親として当然でしょう。では、「目的を決められる人間」に育つには、どうすればよいのでしょうか?

鍵となるのは、日常的に「問いを立てるクセ」をつけることです。

何をするにも目的を理解し、どうすべきかを自分で考えられる力を身に付けることが重要です、親の声かけには、子供の思考を引き出す3段階の質問レベルがあります。

レベル1：指示 「宿題をやりなさい」
→子供は何も考えず、言われたことだけをやる
レベル2：確認質問 「宿題やった?」「明日の準備した?」→問いかけてはいるがYes/Noで答えられるため、思考が浅い

レベル3：目的思考を引き出す質問 「明日はどんな一日になりそう? そのために今日やっておくことは?」→子供自身が目的を考え、必要な行動を導き出す

レベル1の指示ばかりしていると、子供は自分の頭で考えるクセがつかず、逆に「何か言われるまでは、何もしなくていい」と考える習慣が身に付いてしまいかねません。

大事なのは、レベル3の質問のように自分の頭で考えるきっかけを与える質問をすることです。

ただし、いつもレベル3の質問をするのがよいとも限りません。毎回頭を使うのは、子供にとってもストレスになるものです。適度なバランスをみて、少しずつレベル3の質問を増やしていく方が、子供には順応しやすいでしょう。